



岩の上に建てた家

わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それを行う人が皆、どんな人に似ているかを示そう。それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。
(ルカによる福音書 6章 47～48節)

主イエスは、「わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」と言われました。これは読み飛ばしていい言葉ではありません。主イエスの言葉を聞いて、行おうとしたが力及ばずして出来なかったのならまだしも、主イエスの言葉を聞いてもそれを行おうとしないのなら、その人は実は主の言葉を聞いていなかったことになるのです。言葉を変えると、それは主の言葉を信じていないことにもなるのです。

主イエスのたとえ話で二つの家は同じように川のほとりにあったものと考えられます。主イエスがおられたガリラヤ地方は、岩石層の上に砂や土がかぶさっていました。二人の内の一人は、たいへん苦労しながら地面を掘って岩を探し当て、その上に土台を置きました。しかし、もう一人はそんな手間を省いて、土砂の層の中に土台なしで家を建てました。

この二つの家に川の水が押し寄せてきました。洪水になったのです。この時、岩の上に土台を置いて建てた家はびくともしませんでした。しかし、砂の上に土台なしで建てた家はたちまち倒れ、ひどい壊れ方をしました。

しっかりした土台の上に建った家とそうでない家は、ふだん外から見て判別できるものではありません。しかし災難が押し寄せて来た時に違いが露呈したのです。

では主イエスはこのたとえを話すことによって何を教えようとしたのでしょうか。

家を建てる人は神が創造された自然のしくみを謙虚に学ぶことによって、どうすれば洪水が来てもこわれぬ家を造れるか研究します。同じように、人間がこの世界に生きているということそのものが神の働きを前提とし、よりどころとしているのですから、私たちは

2010年10月発行
人生の土台となるべき岩を探そうと努めるべきです。

この話で想定される危機的状況というのは、私たちが地上の人生を歩いていく上で見舞われる不幸や災難を指すのだという解釈がありますが、洪水が家を倒してしまい、もはや建て直せないような壊滅的打撃を受けたのですから、少々の不幸や災難ではない究極的なこと、最後に襲う一度限りの災害のことも考えられます。そうだとすれば、そこに死ということを考えないわけにはいきません。

死は誰にもひとしく訪れます。誰もが死んだあと、神様の前に立たなくてはなりませんから、これはたいへんな危機です。…さらに、この人生も一刻一刻が死に向かっての歩みですから、それもやはり危機的状況の中での歩みであり、その中で私たちはたくさんの危険に取り巻かれています。このとき、人生の土台であるイエス・キリストがなかったとしたら、私たちはいったいどうなるでしょう。

私たち教会に通っている者にとっては、たとえどんな状況にあっても人生の土台としての岩は少しもゆらいではいません。ですから、そこには何ら危険はありません。問題は、私たちがその土台の上にかたく立っていないことです。

それでは、人生の確かな土台の上に立つということがなぜ、主イエスの言うことを行うことなのでしょう。

自分はイエス様を信じている、洗礼も受けた、だから人生確かな土台の上に立っている、それだけでは不十分です。イエス様を信じて、この方を主と呼ぶことが出来ることはそれ自体で大きな恵みですが、それなら、そのお言葉を聞いたまま行わないということがあってはなりません。

神と等しい権威を持つお方、主なる御方、イエス様のもとに来て、その言葉を聞き、それを行うのは、他の何にもまして確実な人生の土台の上に立つことなのです。

(2010年9月5日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊